

令和3年11月5日発行(毎月5日1回発行)
第61巻11月号(副巻748号)

風土



石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

子と買ふや三文菓子の祭飴

(句集『含羞』より昭和三十年作)

この頃の桂郎師は結核性疾患により、左の眼の視力を失います。さらに肺を患い、四畳小屋に寝たり起きたりの生活でした。小康状態になり村の祭に出かけたのです。久しぶりの父との外出に子供は大喜びです。しかし懐にゆとりはありません。夜店の一番安い駄菓子の飴にしました。それを子供と舐めながら、また夜店を覗いて行くのです。父と子の至福のひとときです。

日の緑や茶の花密に主婦の時

(句集『含羞』より昭和三十年作)

「日の緑」とは日差しを受けている緑側のことです。この時代の農家には必ず緑側があり、そこでくつろいだり語らったりしました。またその頃は垣根を茶の木にしたり、近くの菜園の一角には必ず茶の木が植えられています。茶の花の咲く小春日和です。緑側では農婦が、何か手作業をしています。桂郎師にはこれも農婦のくつろぎの時だと感じました。

神蔵器俳句鑑賞

南 うみを

金輪際十夜の綱を握りしむ

(句集『氷輪』より平成十九年作)

前回、京都丹波の日ノ谷山成就院の句碑建立の句を採り上げましたが、器師はその後黒谷の真如堂を訪れています。真如堂では、毎年十一月五日から十五日まで、「お十夜」の念仏法要が行われます。「十夜の綱」は本尊の阿彌陀如来と結ばれており、願いが叶うと言われています。そこでお婆さん(十夜婆)がしっかりと綱を握りしめていくところに遭遇したのです。「金輪際」が効いています。

風呂吹きやほうほうほうと子規のこゑ

(句集『氷輪』より平成十九年作)

器師は「命ふたつ」の理念のもと、単なる対象だけでなく多くの魂と交感をしています。子規もそのひとりです。「風呂吹きや」は子規の「風呂吹の一きれつつや四十人」を踏まえたものです。子規は病床にありながらも弟子たちと句会を開いています。東洋城や虚子、碧梧桐などそうそうたる弟子たちに、句会の合間に「風呂吹」を振舞っているのです。「ほうほうほう」は弟子たちに目を細めている子規の声です。

黒ジヨカ

南うみを

突つ立ちて薩摩の早稲の太短か
畦踏むや田の神さあへ蛙飛び
まづ火山灰を払ひて父祖の墓洗ふ
つくつくしかなかなかなと父母のこゑ
鯉跳んで入江の盆の生臭し

迎火をまた潮風が消しにくる
西郷どんの山噴いてゐる切子かな
月仰ぎ大溶岩あふぎ踊るかな
生身魂すなはち兄は卒寿なり
焼酌そつ酌つむはいまも黒ジヨカ生身魂
「黒ジヨカ」は薩摩焼の酒器
苦瓜の豚味噌和を食べもんせ
「おいが」は「俺が」「わいが」「お前が」
盆三日「おいが」「わいが」と焼酌を酌み



竹間集

同人作品



稲の花

森 高 武

鬼やんま黄黒ロープの先に沼
翡翠の一閃沼面の緊張す
秋暑し何か出さうな草の丈
稲の花青鷺は道を通せん坊
落日の光の中の猫じやらし
デッキチェアに女一人の秋の浜
花カンナイジーライダー疾走す

施餓鬼寺

豎山 道助

天瓜粉吾子にひかがみふくらはぎ
施餓鬼寺朝から鴉来てをりぬ
パナマ帽元伯爵の家系なる
虹二重人間だけが嘘をつく
アムールの小石が七つ瀬祭忌
光芒の永き一瞬稲の花
武郎忌の日光線のレール音

風の秋

浜 福恵

あらかたを委ねて軽し盆用意
仏前に控へ牛馬の茄子や瓜
仏間の隣に寝起き致して生身魂
玲瓏の月渡りゆく盆二十日
草に木に二百十日の夜半の雨
小さな庭の秋に居着きて藪茗荷
雨のち晴ポニーが駈ける風の秋

夕かなかな

池田光子

鵬猛る結界といふ静けさに
落蟬に膝折つてゐる女の子
夕風や素揚げの茄子の紺の照り
ガス屋来て庭の無花果挽ぎて食ぶ
鳳仙花昭和の風は路地を抜け
黒潮へのびゆく砂洲や燕去ぬ
もう誰もぬない故郷夕かなかな

至宝展

落合 絹代

東京駅ドームを窓辺秋高し
新涼（新涼の秋）やミストに淨む至宝展
秋澄めり『つれづれ草』の上下巻
旅の荷を置くやたちまち秋あかね
一步一步蟋蟀とびだす朝の庭
風評はいつの世もあり終戦日
原爆忌旋回長き伝書鳩

夕野分

門伝 史会

梅干のひとつつひとつを裏返す
土砂降りの後の晴れ間や蟬しぐれ
施餓鬼経極楽からの風の吹く
盆灯籠遠い記憶の顔ばかり
樹上より人声のして紅芙蓉
秋暑し顔の半分忘れをり
播粉木に胡麻の香のこる夕野分

宗旦木槿

鈴木 石花

燃ゆるものみな天上へ星月夜
群れ為して赤蜻蛉舞ふ児童園
巻紙に小筆走らす宗祇の忌
菩提寺の茶庭宗旦木槿咲く
癒え近き医へ通ふ路稲の花
無観客のサッカー激戦秋灯下
江戸・宮城枝指し交し萩垂るる

新涼 山田 暢子

新涼や家の中まで外の声
初秋や杖ついて行くごみ収集場
書き出しにとまどつてをり虫の声
八十路にてピンクの色の秋日傘
植物人間となりし友あり長き夜
銀漢や一会一期の友の数
月光に白敷き詰めて蕎麦の花

盆の雨 岩木 茂

「とくとくの泉」より湧く秋の声
新涼の海へ散りゆく船の水脈
一本の川の貫く盆の村
虫鳴くや外宮に月宮風之宮
晩夏光小屋に蛸壺積み上げて
石垣に蛇垂れ下がる孟蘭盆会
どの墓も等しく濡らす盆の雨

山日和 小林 輝子

流れ星願い事のみ多かりき
歩行器に凭れ合掌広島忌
山の端に残る夕日や門火焚く
手入れなき裏畑虫のすだくかな
畦を過ぎ草の実数ふスラックス
秋まつりせんなき事をのみ想ふ
花蕎麦の色の弥増す山日和

秋涼し 田中佐知子

新涼の平飼ひ卵ほのぬくし
夫婦して住める異郷の門火かな
空海に焦がれし母や霊送り
雨の夜の鉦の古とも秋風鈴
盆の月ひたに河口をさかのぼる
落葉松に透ける星々秋涼し
放哉の寺秋雲の行方かな

秋を知る 中村 洋子

秋の雲払ひて富士の峰尖る
絹雲のひとすぢよぎる盆の月
燃え尽きる門火の闇に佇ちつくす
つんのめりつんのめりして施餓鬼舟
月山の水のうまさよ赤蜻蛉
お土産のおかめ南瓜を画材とす
掛け声も澄みてソーラン秋を知る

豆 筵 浅田 光代

捕鯨図を掛けて晩夏の喫茶店
大股にゆく送行の青つむり
秋立つや新刊の扉を開くとき
鬼柚子にどかどぶつかる日和かな
秋の蝶寄らず離れず水のきは
一村のしんかんとして豆筵
長き夜のふいと出でくる国言葉

星月夜 橋添やよひ

大文字や疫病火柱六つとなり
くろぐろと五重の塔や涼新た
火を潜りし四天王像すさまじき
柱疵浮きし御堂やいなびかり
書き遺すこと書き足して星月夜
六十年京の大暑に住み慣れし
あかとんぼ一葉生家のポンプ井戸

新涼 柿沼 盟子

日盛りや捧げて帰る竹の棒
大風の隙間を埋むる蟬時雨
青柿の落ちて弾まず転がらず
門前にベンチ置く寺立葵
蒲の穂や流れかすかにあるらしく
新涼やさつと炙りし油揚げ
棧橋の乾く湖畔や赤蜻蛉

第44回桂郎賞俳句部門入選

桃の花

六車 佳奈

たんぽぽの花粉まみれの男の子
天瓜粉くるりと吾子を裏返す
菖蒲湯へ泣き虫の子を放りこむ
武具飾り吾子を前へと押しやりぬ
背の子の心音を聴く蛍の夜
夏潮や莫塵に赤子を眠らせて
嬰のゐて遺影ざわめく夏座敷
小鳥来て子のはひはひの加速する
やはらかに乳ふくませて花芙蓉
鈴虫や吾子眠るまでもう少し
初釜の静寂を割つて吾子のこゑ
虎杖を噛んでゐる子の無表情
風船に曳かれくる子の転びけり
さあおいでチューリップまで歩かうか
友だちはトブルドブ君春の雲

冬あたたか臨月の臍盛り上がる
陣痛を招き寄せたる寒の月
産み終へて空つぽとなる雪の夜
凍つる夜へ明かりの漏れて授乳室
雪の夜の初乳に染まる産着かな
注連飾る門の賑はひ襦袢替ふ
初凧の島に赤子を見せにゆく
乳欲しと春月を蹴る赤子かな
さびしさは子を抱きてより桃の花
嬰の眼の煌々として春の闇
春宵やぐぶり寝る子の舟となる
春の風百日迎ふ嬰笑まふ
子を預け胸のうつろや桜降る
乳母車のぞきこむ姉花ゆすら
はじめての子の友となるすみれ草

第44回桂郎賞俳句部門入選

山のない村

石井美智子

ソ　　農　　片　　神　　農　　一　　農　　神　　片　　農　　ソ
ー　　大　　言　　官　　場　　村　　場　　官　　言　　大　　一　　場　　官　　言　　大　　一　　場
ラ　　キ　　の　　は　　の　　の　　の　　の　　の　　の　　の　　の　　の　　の　　の　　の　　の
カ　　ャ　　ワ　　は　　山　　の　　の　　の　　の　　の　　の　　の　　の　　の　　の　　の　　の
ー　　ン　　ッ　　白　　な　　機　　械　　点　　検　　秋　　近　　し
向　　パ　　シ　　神　　山　　な　　き　　空　　に　　大　　銀　　河
日　　ス　　ョ　　イ　　地　　き　　村　　に　　入　　る
葵　　に　　集　　ふ　　村　　人　　祭　　笛
の　　下　　次　　々　　と

春　　干　　春
耕　　拓　　耕
の　　の　　の
土　　記　　土
に　　念　　に
む　　公　　む
か　　園　　か
し　　桜　　し
の　　ど　　の
貝　　き　　貝
の　　殻

山河集

同人作品



南うみを選

百日紅散りゆけ川よ流れゆけ

磯崎 啓三

百日紅玄閑遠くひつそりと
百日紅昭和つましく散りゆけり
にはか雨瓦に乾く暑さかな
月光に胸あぶらるる暑さかな

頑な返事ばかりやへぼ胡瓜

根岸 善行

街騒をくぐりぬけきて冷し酒
初秋の心づくしの風の音
鯛や一番星を研ぎ澄ます
天心は無風の光稲の花

妖精になりてバレエや夏休み

森田 節子

弧を描く投げ釣りの糸秋立てり
飯盒に飯噴く匂ひ鰯雲

稲の花村の正午の鐘わたる
天の川一塊にして八ヶ岳眠る

秋の園宝の箱の中にある

森高さよこ

沖を行く二百十日のフェリーかな
カンナ咲くいつか二人の墓地の道
ジーパンは子よりのお古赤とんぼ
頬杖に聞く波の音秋の音

ちちははの齢越えたる良夜かな

仲まゆみ

山蟻の浮くごと走り抜けてゆく
西瓜食べ兄より遠く種飛ばす
荒草の茫茫光る露の朝
穂孕みの八月明快なる瀬音

風土独語／南 うみを



月光に胸あぶらるる暑さかな

磯崎 啓三

私たちは「月光」を冷たい光と捉えがちですが、作者は「胸あぶらるる」と置きました。この感覚は並々ならぬものです。熱帯夜で眠られぬ胸を、月光が火と化して照りつけるのです。

人生の途中朝顔濃かりけり

根岸 善行

「人生の途中」と言う言葉は、人生の起伏を乗り越えて来ないと簡単には使えません。それまで何度となく朝顔と対峙してきた作者は、今日の朝顔が特に濃い色合いであるのに、喜びを感じているのです。大きさに言えば「生きていてよかった」と。

妖精になりてバレエや夏休み

森田 節子

バレエを習っている少女を描いています。夏休みの間、ひたすらバレエに打ち込むのです。少女は役柄の妖精になりきり、くると床を舞うのです。

万物に翼のある絵夏休み

中嶋 陽子

これも、夏休みの子供を描いた作品です。「万物に翼のある絵」に、子供らしいアニミズム的な思考が見られ楽しくなります。恐らく右ころも翼を持ち、空を自由に飛び回るので。大人がどこかに置き忘れた思考です。

秋の園宝の箱の中にある

森高さよこ

俳句は読み手の想像力を補完して完成します。ここでは「宝の箱」がそれにあたります。読み手は、それぞれに秋の園のとりどりの花や澄んだ空気、爽やかな風を想い浮かべたらよいのです。

稲刈りの臀部大きくなるばかり

山田 健太

この句は、デフォルメにより手刈の稲刈り風景を描いています。農婦が屈んで稲を刈り進む、そのお尻の逞しい事よ。稲を刈る、ザリザリと言う音も聞こえてきます。

穂孕みの八月明快なる瀬音

仲まゆみ

この句は、あまり俳句では使われない「明快なる」言葉を置くことで、新鮮な世界を作り上げています。稲の穂が孕んで来た八月、瀬の音も秋らしくはつきりと聞こえてくるのです。それを句で切り取っています。

秋声の真中を通る弓袋

六車 佳奈

「秋声」は、木立を吹く風、せせらぎの音、鳥や虫の声など音で捉えた秋の気配です。この句は「弓袋」を組み合わせることで、秋の気配を耳で感じつつ弓道場へ向かう人物を描きました。きりっとした空気が伝わります。

風土集



南うみを選

薔薇の夜のワイングラスの脚長し 川崎 森田 節子

七月の鮎のリゾット焦げ目あり
朝穫りのしの字に育つ胡瓜かな
ふるると子の匙逃げる梅ゼリー
リユックよりアルミのコップ岩清水
夏旺ん三越ライオンマスクして 川崎 津川かほる

樹樹覆ふお鷹の道の崖清水
羽衣の舞のやうなる海月かな
縁の色変へて双子のサンダラス

東京五輪

雪辱の汗や柔道金メダル
空洞木の白き膚や晩夏光 舞鶴 小原芙美子

串打ちの腸ごと齧る土用かな
出るやいな蚯蚓草ごとはふるるる
古木戸を屈んで来る祭獅子

河鹿笛椽の巨木の立つあたり
水筒の大きく揺るる夏帽子 町田 松本 胡桃

桑の実や母のそばかす譲り受け
俎に水かけまはし雲の峰
冷奴爪を短く暮らしけり
海老フライからりと揚がる梅雨晴間
草の色モザイクめきし春田かな 宇治 古橋 寛人

締め込みの尻のきりりと荒神輿
かつかつと馬蹄の響き賀茂祭
ざわめきのあとのどよめき神輿来る

冷やならば切子グラスで鉄線花
梅雨籠佳きこと一つ届きけり 上尾 根岸 善行

長雨の上がりさうなる胡瓜揉
梅雨明や雲へ心を解き放す
山風もガレの器に冷し酒